

春一七二句

鎌倉の梅がよかると連れ立ちて

建長寺

海東の法窟の梅心当て

まんまると梅の苔を誉むるこゑ

梅を見て廻る歩幅となりあたり

紅梅に紅梅のとるよき間合

黒髪に吹きつける風紅梅へ

梅かをるをみなの引目鉤鼻に

その梅は豊後と告ぐる破裂音

眼の馴れてつまらぬ彩の紅梅よ

天神の梅に祝詞のりとの出だしかな

かつかつと寿福金剛禅寺の梅

風すこし出できぬ梅見切り上げむ

妙法寺

事旧れど杉田の梅を偲ぶべう

園の梅何分咲きかと確かむ風

真向より烈風を受け咲ける梅

紅梅に赤坂小梅あぎと顎引き

紅梅の雨滴とろりと枝をつたひ

叡尊の鎌倉下向も梅の頃

慈姑食ぶ似合ひの齡ありぬべし

ものの芽に大きくなりぬ雨の音

山菜萁の一昨さきおとつ昨日より咲けるとや

花さんしゆゆ日差しに斑のありにけり

花山菜莢いり玉子めき夕日中

預けおく彼岸団子を帰るさに

まんさくに昼の風向きかはりけり

まんさくに四通八達風のみち

磯山の松にのぼれる藤の花

みつまたの夕づく蒼思慮深げ

大榎の幹のざらりと寒明くる

ひよいひよいと鳶餅を包み呉れ

それではとうぐひす餅に手をつけぬ

魚氷に上りつらきめに遇ひにけり

立春の夜を馳すバスは光の函

ひかりつゞくびれてながる春の水

鎌倉を驚かしたる……

素破こそとばかり余寒は詠むべかり

先達てお目に掛かれり佐保姫に

法窟の椿ころがる其処彼処

一飛鳥椿林をすり抜けて

木五倍子きぶし咲く道を大仏方面へ

突然の雨に木五倍子の華やげる

にはとこのふためき出づる木の芽道

にはとこの出臍のごとき芽の並び

接骨木のこんな花かとくささるる

菜の花のきちがひじみしひかりあぶ

油菜にアゲハ春型かさむりて

安房花菜日和ずんずん歩きけり

菜の花にずんと展けて安房の海

入船莊花菜畑を突つ切りて

一泊が二泊となりぬ花菜村

絹莢のさして頼りにならぬ蔓

春一が蒲団落としてゆきにけり

春荒れにとんび揉まれてひようと鳴く

双眼鏡あたたむ海の春日差

兔波マーガレットに駈け寄りぬ

風除け篠ストツクの香を封じけり

ストツクに顔突つ込んで剪りにけり

煽られてポピーフレンチカンカンめく

蚕豆の正東風まごちに吹かれ勁き茎

春風は海を渡りて檳榔樹

張りぼての岩のやうなる春の雲

三桮の暖雨まみれに岐るゝ枝

鳥好きの人と聞きゐる家朧

ダチユラ咲き当地至つて温暖な

やまももの巨木なるほど温暖な

あたたかや寺門に並める通用門

来し闇もドアのノブも暖かく

浦浪の頭をもたげくる涅槃吹

春潮に一艇一艇打たれ鳴る

摘むのは芹ですかえゝまあたんぽぽも

鉢売の三四十二のサイネリア

啓蟄や消炭いろの鯉直進

啓蟄の水蹴破りてドイツ鯉

啓蟄の石押し退けて何ぞをる

蠅の子の止まりつぷりも物馴れて

蠅の子の追はれて次に止まる処

ユスリ蚊と正体知れてはしやぐもの

ユスリ蚊のかいぐり遊びはじまりぬ

雉のこゑ天気予報をくつがへし

てうちてうちあはゝと緋木瓜咲きにけり

更紗本瓜三弦商の庭さきに

枝いっぱい賑やか好きな桃の花

雛の日の入日雑木にさし込める

雨ながら桃は咲きたい時に咲き

桃の花時間どんどん経ちにけり

雛かざる干潟色なる夕日中

雛段に午前の日差しさし込みぬ

表具師の家の黄瀬戸の坐り雛

陶雛の肩の釉薬明りかな

恋猫のこゑを真似して通りけり

恋猫の何にのぼれる爪の音

燕来ぬ海の玄関横浜に

かすめゆきしものつばくろでありにけり

甲斐駒岳か  
い  
こ  
まを前にのけぞる乙鳥

昼日中あんずつまらなさうに散り

梅は了り杏咲きそめ桃半ば

べんべんと昼のすももの花散るも

連翹の今を盛りに誰も来ず

れんげうのざつくばらんな枝を四方に

ほころびて垣の連翹味噌つ齒めく

郁李にはうめの咲けば出がけに立寄りて

是しきの雨に郁李散れるなり

花仕度了へてはくれむ待機せり

おてだまを抛りあぐごと白木蓮

はくれむに吹いて一層強き風

こんもりとはくれむ咲かす家殖えて

はくれむに放送衛星巡るかな

はくれむをほぐしにかかる朝の雨

はくれむに雨吹っかけて来たりけり

隔たりて同じ雲雀を見てゐたり

一列にちやんと並べりチューリップ

並び立ちステロタイプのチューリップ

大如雨露ぐうるりぐるりチューリップ

チューリップ散りて吹かるゝ茎二三

なまぬるき風を展げて大干潟

ジーパンをたくしあげては浅蜷搔く

貝ほじくり返し干潟を汚せるも

馬刀貝を挙げし海辺に住み古るも

揚げられて鹿尾菜天草一緒くた

滴れりみみずのやうな鹿尾菜の茎

麗日のワラビー母子の餌の持ちやう

ワラビーの前脚春の土突きて

日永鰐夢む手足の置きどころ

コンドルの怒り肩して春逝かす

鍵一つ掛けて出づ家茎立てり

大きくて立派な鉢や紅牡丹

真上より覗きて牡丹いびつかな

円覚寺塔頭

まぶしかり雲頂庵の白牡丹

愛染明王示現牡丹の花中より

追ひ追ひに池の廻りのさくら咲く

北条実時銅像。重時は極楽寺殿、時頼は最明寺殿と称されれば

称名寺殿の頭に花散れり

花このまゝ仏生会までもたせたし

一体に海岸ぶちの花早し

横浜絵

野毛山のさくら馬上に魯西亞人

おろしや

ときめける花に湿りをくれに雨

いとたやすく花の抜け落つ糸ざくら

夜桜にあがる焰の二夕柱

花乏し降られづめなる鶉に

このところ変な陽気に蘇枋咲く

紫荊噴ける蒼の笹棒な

山吹の上の断崖底技けし

山椒魚の手足を置ける水温む

伝説の人魚（海牛目海牛科）

マナテイの身じろげる水ぬるみそむ

象亀の砂に喰ひこむ四温の手

蕨手のによつきり南洋リュウビintai

蛸の木の根の遣り場なき室<sup>むろ</sup>の春

椿展

パツと明るくシヨウタイムてふ紅椿  
しつとりとリップステイクてふ椿

河原鶉ひよいと頭沈め餌をあさる

腋パツと開きて河原鶉立てり

句を案じ暫し朝寝も虚子掌上

永き日の郵便受に余るもの

かたわれの函を探せる日永かな

諸葛菜晦日の雨に伸び切りて

茎立や妙にあかるきゆふまぐれ

遣る水をじはつと吸へり君子蘭

花からたちこころ疎にしてそこは密

さくらさう二つ返事で咲きにけり

さくらさう貯金ちよっぴり利子ついて

何と手の混める貝母の花の裡

女童の立つてふらここ漕ぎ出せり

クローバを分けくるダックスフンドかな

山麓の溶岩隠り虎杖摘

ぶつつりと切れて南無三のびる玉

わさび田をはすかひに馳す水ありぬ

昼過ぎの雲雀のこゑの中弛たるみ

あれこれと詮索しをり古巢の材

ひこばえや集合時間告げられて

青饅にはつと気付ける親不孝

大拳して実朝の忌の沖つ波

俳壇の六十余州横霞

海苔巻のすこし乾ける遅日かな  
老鶯や起きて欠伸をもうひとつ